

子どもの本

研究会



【私の一冊】

講談社の絵本 ゴールド版

【曾我物語】

文・福田清人 絵・米内穂豊

堀畑正臣



小学二年の頃、上天草の離島から八代へ家族で行く機会があり、買い物済ませた母親が、本屋さんで「好きな本を一冊買つていい。」といった。本屋の下の子に並んでいた絵本の中からこの一冊を選んだ。

表紙には二人の童が描かれていて、昔の物語だと思った。絵本の中で覚えているのは、紅葉した山中で狙われる武士、その後、太刀と弓の稽古をする二人の童、それを泣きながら諫める美しい母親。話は飛んで、浜辺で処刑されようとする二人の童のもとに許しの使いがやってきて、間一髪命は救われた。その後、富士の裾野での大巻狩り、雷が鳴り響く夜の夜の仇討ち、仇討ちが成就してから頼朝を討ちに行く五郎、討ち損なって捕まり尋問のあと処刑された。

何度も絵本の絵を眺め、文を読んだ。娯楽が少なく、TVがまだ家になかった頃だった。小学二年の脳裏にどこか自分のいる場所とは違う時空の物語としてすり込まれていた。そして疑問が湧いてきた。何故仇討ちの後、頼朝は狙われたのか。鎌倉の武士達は何故曾我兄弟をかばうのか。いつの時代、どういう場所、どういう境遇なのか。分からないままであった。目の前の海や島とは別の世界がどこかにあると感じていた。その後、小学四、五年の時、NHKの大河ドラマで「義経」を観た。小学五年の頃、『源平盛衰記』（子供用）を読み、小学六年で馬琴の『椿説弓張月』（子供用）を読んでいた。

一冊の絵本の印象が、兵と達や軍記の世界へ導いていった。子供の時に読んだ絵本は影響力をもっている。大学で専攻を決める時、歴史か国語か迷った。結果的には国語学を専攻したが、研究対象は古記録で資料は歴史物である。

中学一年の頃、遠縁のお姉さんの本を貸してもらえらることになり、選んだのが『源氏物語』であった。「平家」の話は大分わかってきたので、もっと「源氏」の話を知れたかったのである。家に帰って本を開いてびっくりした。そこには「源氏武者」の話はなく、よく分からない話が展開していたからである。

（熊本大学教授）